

STEAM教育を取り入れた  
新しい時代の幼児教育

# How to ART for Children

こどもにとっての**アート**とは？



学校法人福島わかば幼稚園

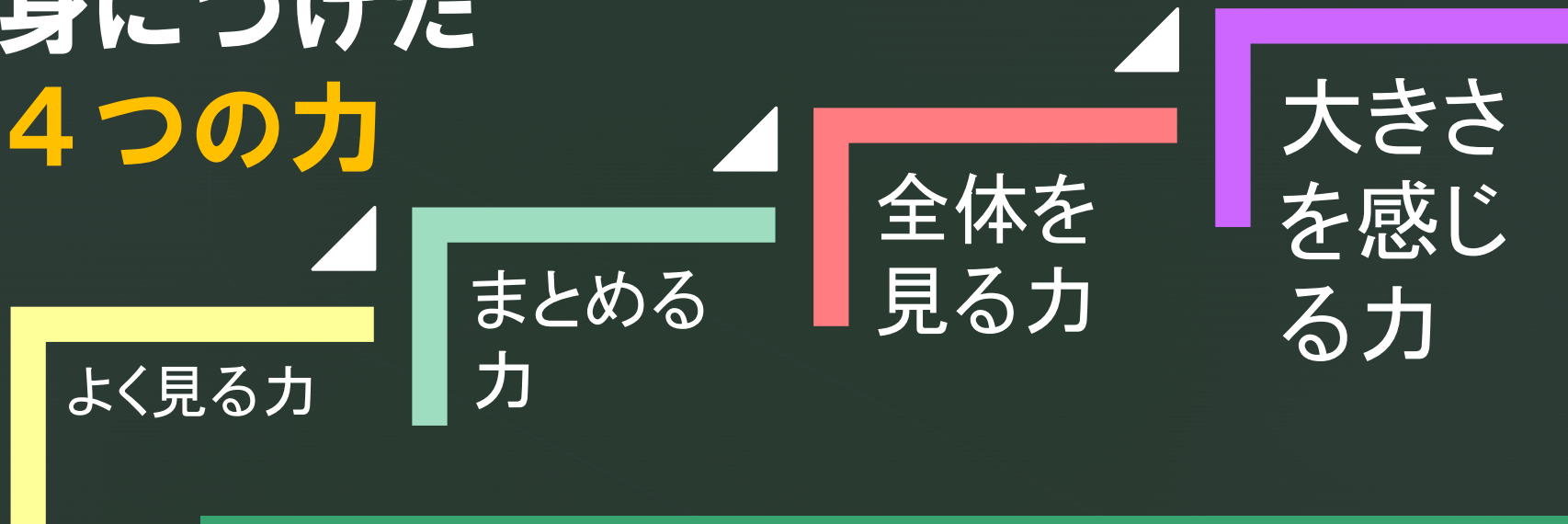
作成日:2021年4月

作成者:美術講師 草野志門

最終レポート

# 作品制作のプロセス

## 身につけた 4つの力



4つの力に分けることで、自分自身で学習の目標が立てやすい！

自分に足りない力、充実している力を理解し、さらなる学習の意欲や効率の良い学びを促進する。

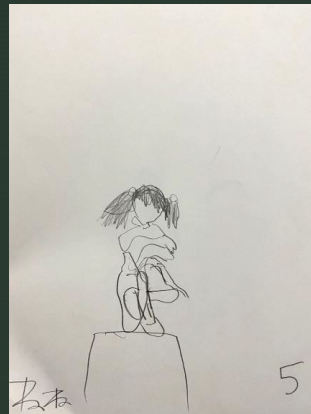
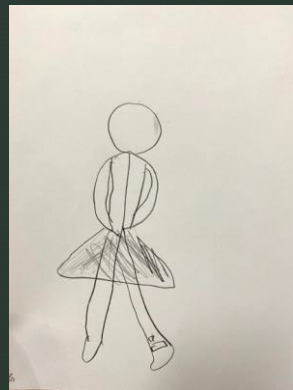
学びの段階化は、他の学びでも使っていることだが、「アート」において使用したことが大きな違いと言えるだろう。アートの学びにおいて重要なのは、「自分がどうしたいのか」という表現欲求と自由な思いで表現できることである。アカデミックな学びも、ただ教科学習のように反復で覚えるのではなく、アート表現として、より主体的で深い学びを得るために、自分で考察できる段階「4つの力」として学びを充実させた。



# 4つの力を通して得た視点 ～こどもたちの変化～

## ■ モデルクロッキーでの変化

2分間のクロッキーを10枚程度行った課程。左から、1枚目・5枚目・10枚目。



大きな動きを捉えることが出来ると、だんだんと人体の構造にも理解が深まる様子が分かる。

## ■ 自画像デッサンにおける変化

左から、1枚目～3枚目と続いている。段階的によく見る力等を養う指導を行ったことで、モチーフを見る視点が変わってきている。人体の構造や周りの風景など多くの情報を処理出来るようになった。



よく見る力を養う上で最重要視したのが、情報を段階的に処理することだ。それにより、自己の表現の幅を大きくすることに成功している。



# 作品展の実績と反響

## 第6回220人展(3/23、24開催アオウゼ4階大活動室1~3使用)

- 来場者数**329人**⇒例年は土日を含めての3~4日開催で400人程度であることから、今回の反響大きさが分かる

### 来場者の声

2021.3.24  
園児の皆さんの絵を楽しく拝見しました。  
子どもたちの理解する力、吸収する力、発想する力、表現する力に  
圧倒されました。50年前、自分が幼稚園児だった時は、絵を描くと  
先生に言われても、この話のストーリーはなかったです。子ども達の無限の可能性  
素晴らしいですね。卒園児の達成感がこちらにも伝わってきました。  
絵が大好き

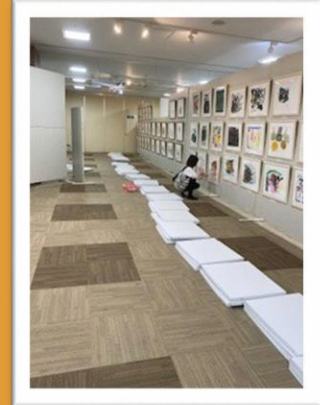
絵の具やクレパスを幼稚園に入園して  
使ったことがなかったのに上手に  
塗けるようになっていてびっくりです。  
幼稚園で学べるようになってからの成長を  
して下さるの嬉しみにです

ありがとう  
えろと  
幼稚園のみんなの絵が楽しかったです。  
これからはもっと下でいい。  
たのしみです。子供の園での様子が聞けて  
よかったです。ありがとうです。

とても楽しい思い出が沢山あります。園児の皆さんが描いた絵は、どれも  
1年間、子ども達の様々な作品が飾られて、その時々々の  
成長、子ども達の笑顔、幼稚園生活の思い出が  
見られるように、ぜひこれからも続けていきたいと思います。  
型はあらず、自由な発想で感じました。  
何の正解もない、思い思いの絵で、自由に描いて  
思いました。作品展企画ありがとうございました。



### 準備風景



### 会場内の様子



# Children on the landscape 制作の裏側

## ■ 初めての自画像大作は困難を極めた

### 第一の難関:「塗り絵にしないこと」

等身大の人型を取ることによって、「描く」よりも「塗る」になってしまうことをもとより危惧していた。これを解決したのは、念入りな導入に他ならない。人体の構造と人体の動きからどのような感動を貰うのかのプロセスを解明し、より良く伝えることから始めた。

プロジェクターとiPadを駆使した独自資料に基づき、情報共有の効率化と共有後の制作へのスピード感を大事にした。なぜなら、実制作においては、常にライブ感があり、肌で感じられる内容が多いのに対して、情報共有では形式的になりがちで学びと感動にずれが生まれるからだ。多くなった情報量を伝えるのに最新のデバイスを活用した。フルカラーの映像、画像といった視覚情報により、感動を得やすく、時間の短縮も可能になった。それらの工夫により、実制作における学びと感動が大きくなったことは言うまでも無い。

### 第二の難関:「自分の表現を考える」

これは制作における永遠のテーマでもある。自分が何者であって、何を成し遂げたいのか、その先にどのような風景を思い浮かべているのか。誰しもが人生で考え得ることでもある。その難関に来たときに伝えているのは、「君はどうしたい？」という問いかけだ。美術講師を含めた、大人や教師の役目は、その子どもの学びを最適化させることに他ならない。最大限の学びの援助・助言をした後の道を選ぶのは、子ども自身でなければならない。

そうすることで、自分の行動に責任を持ち、大きく進むことが出来る。この学びの大きさに気づくことで、そこから先の表現を自分で決められるようになっていった。むしろ、自分自身で混色の工夫や友達との情報交換を行うことで、より大きく学びの質を上げていく様子が見られた。





# 考察・これからのアート教育・幼児教育とは ～先生たちの声と共に～

## 先生たちから見た子どもの様子

- 何かやりたい、頑張りたいけど、何を頑張れば良いのか分からないという経験があるからこそ、アートを通して自分の目標を見つけられたのは良かった。
- 4つの力の最後まで学習して、初めて自分がどうしたいのかが見えてきた。そこから、さらに挑戦する意欲が湧いてきた。
- iPadやプロジェクターを駆使した視覚的に具体性のある資料が多いことで、分かりやすかった。また、子どもたちもより関心を持ち集中して取り組む様子が見えた。
- お友達の頑張った絵画など、身近な人の頑張りをみることで、それぞれの目標が定まった。

### <考察>

AI化や多様性への認識を改めている世界において教育は、一つの答えを求めたり、ただ作業的に答えを求めたりすることに価値はなくなってくるだろう。それよりも、答えのない問いに挑み続けることで、独自の視点から新たな価値を創出することや多様な生き方の中、本当に自分がどうしたいのかを発見することが大事である。そのために「アート」はとても有意義な学びとして用いることが出来ると教員、講師共に再確認した。